第九回

神奈川県
美術展

第九回

神奈川県美術展

1974

主催

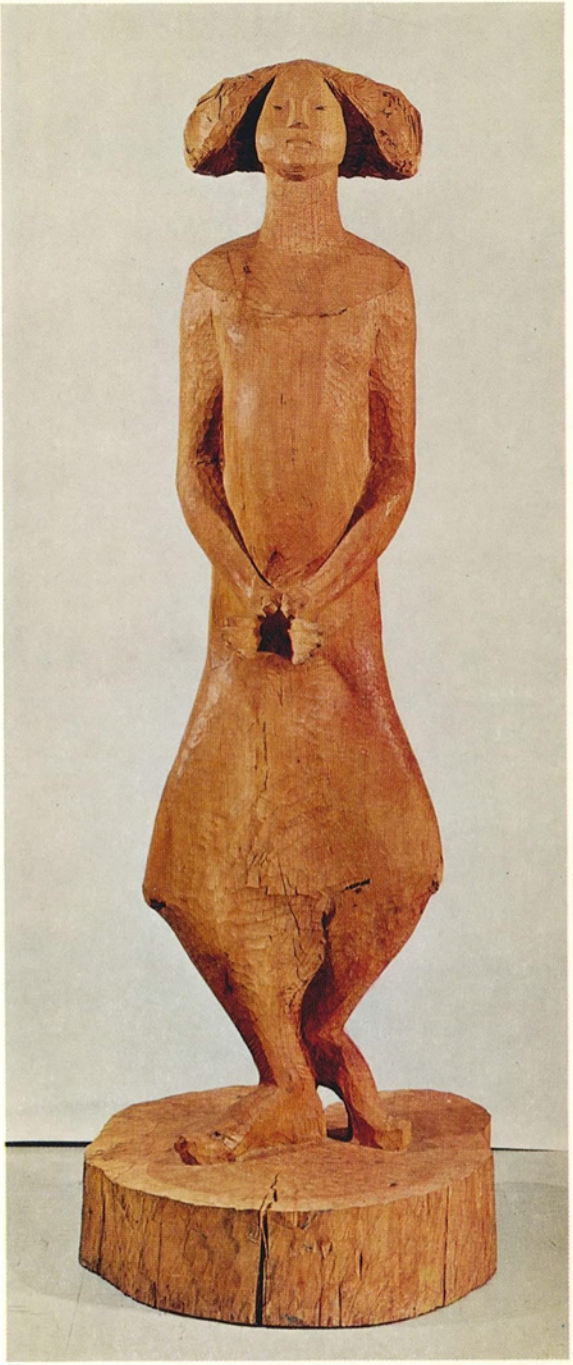
神奈川県美術展委員会

神奈川県教育委員会

神　奈　川　県

3月2日—17日	県立近代美術館 〈コンクール部門・絵画・版画・彫刻・立体造形〉 県立博物館 〈コンクール部門・工芸・書・写真〉 〈招待部門・立体造形・工芸・書・写真〉
3月7日—12日	横浜高島屋 〈招待部門・絵画・版画・彫刻〉

コンクール部門

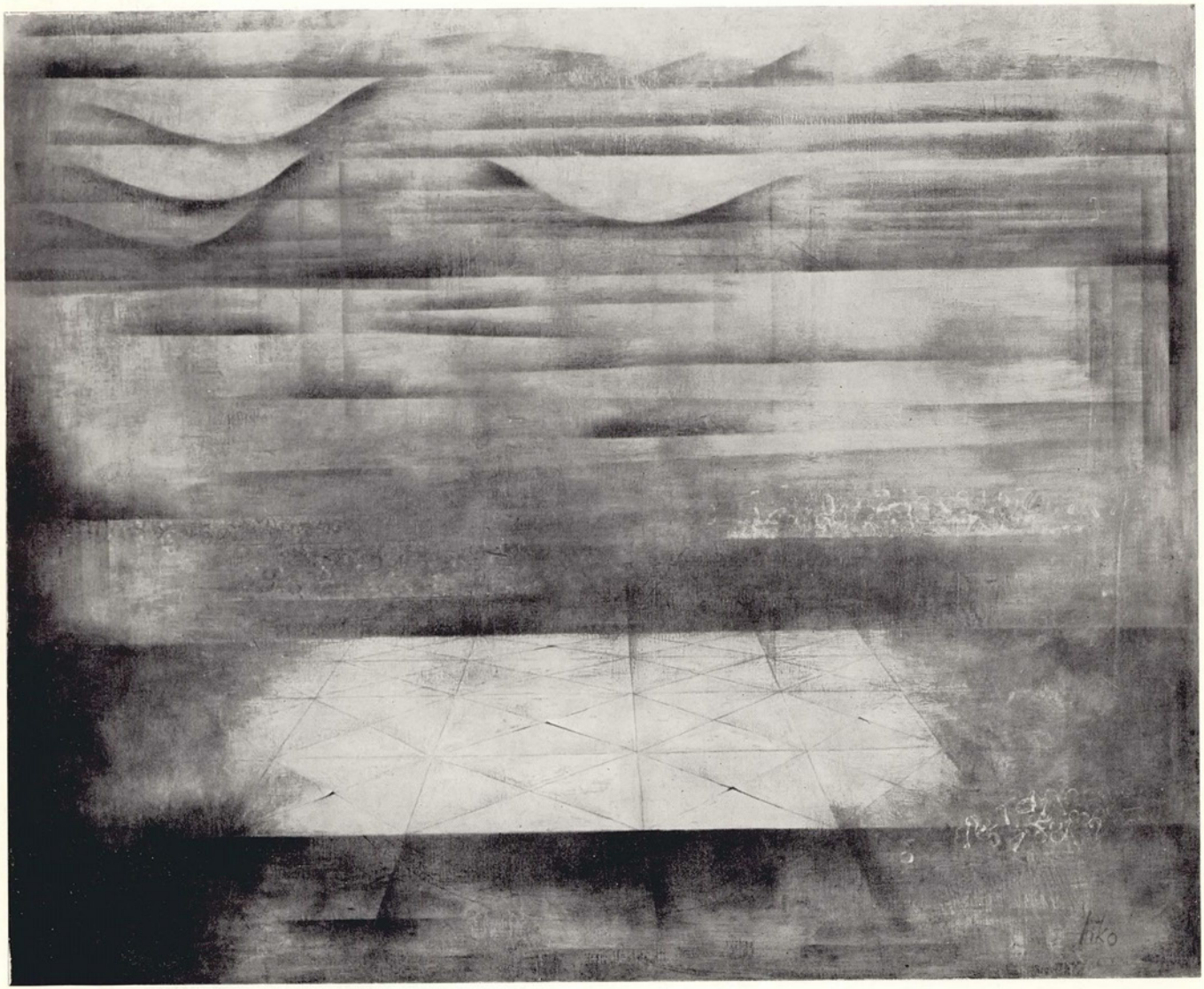


大賞　河原　明　蜻蛉　（彫刻）

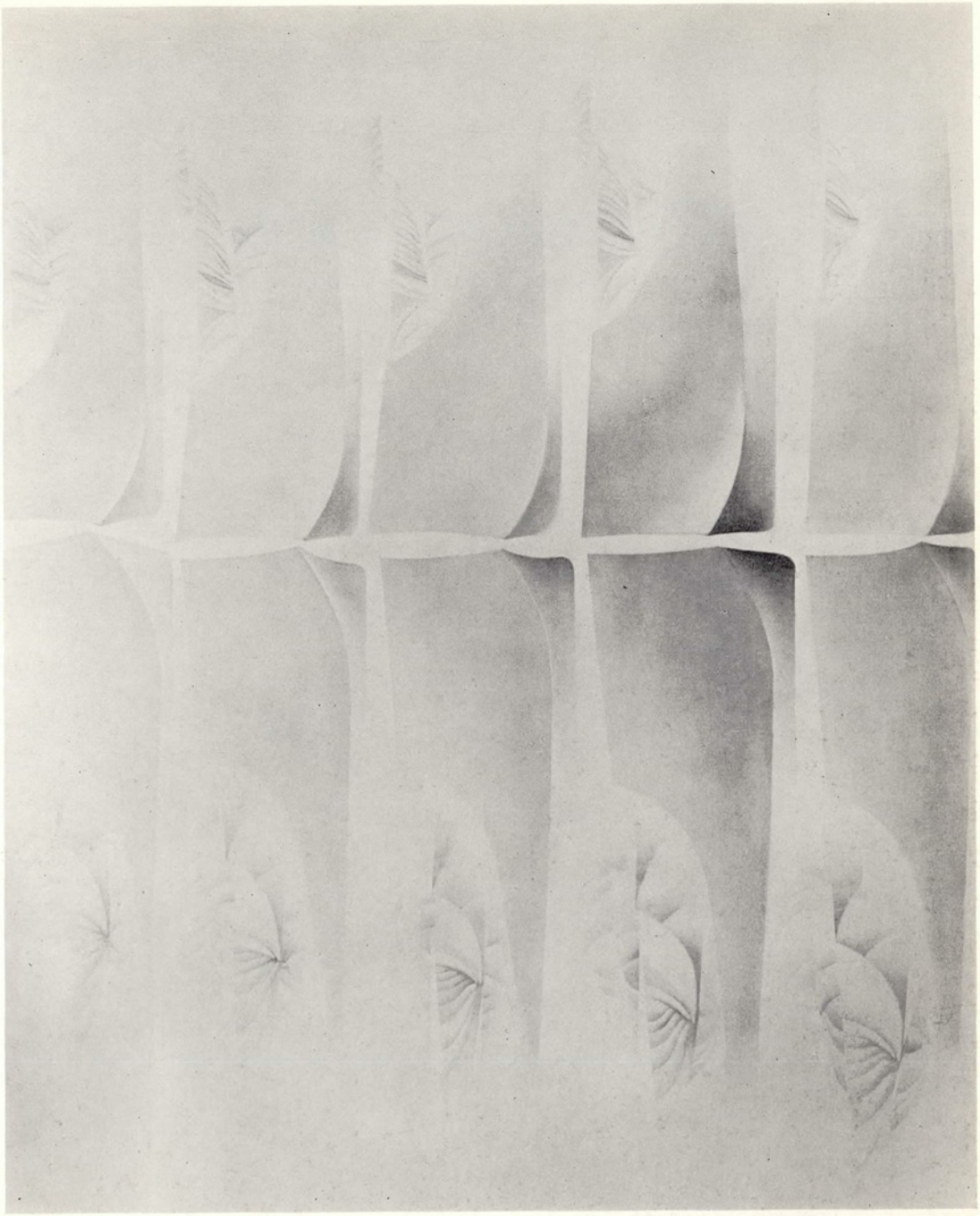
大賞　石川充宏　Girl in Chair（工芸）

美術奨学会賞　大山　鎮　ベナレス(衆)III　(日本画)

特選　宇野圭一　草の中の女　（日本画）



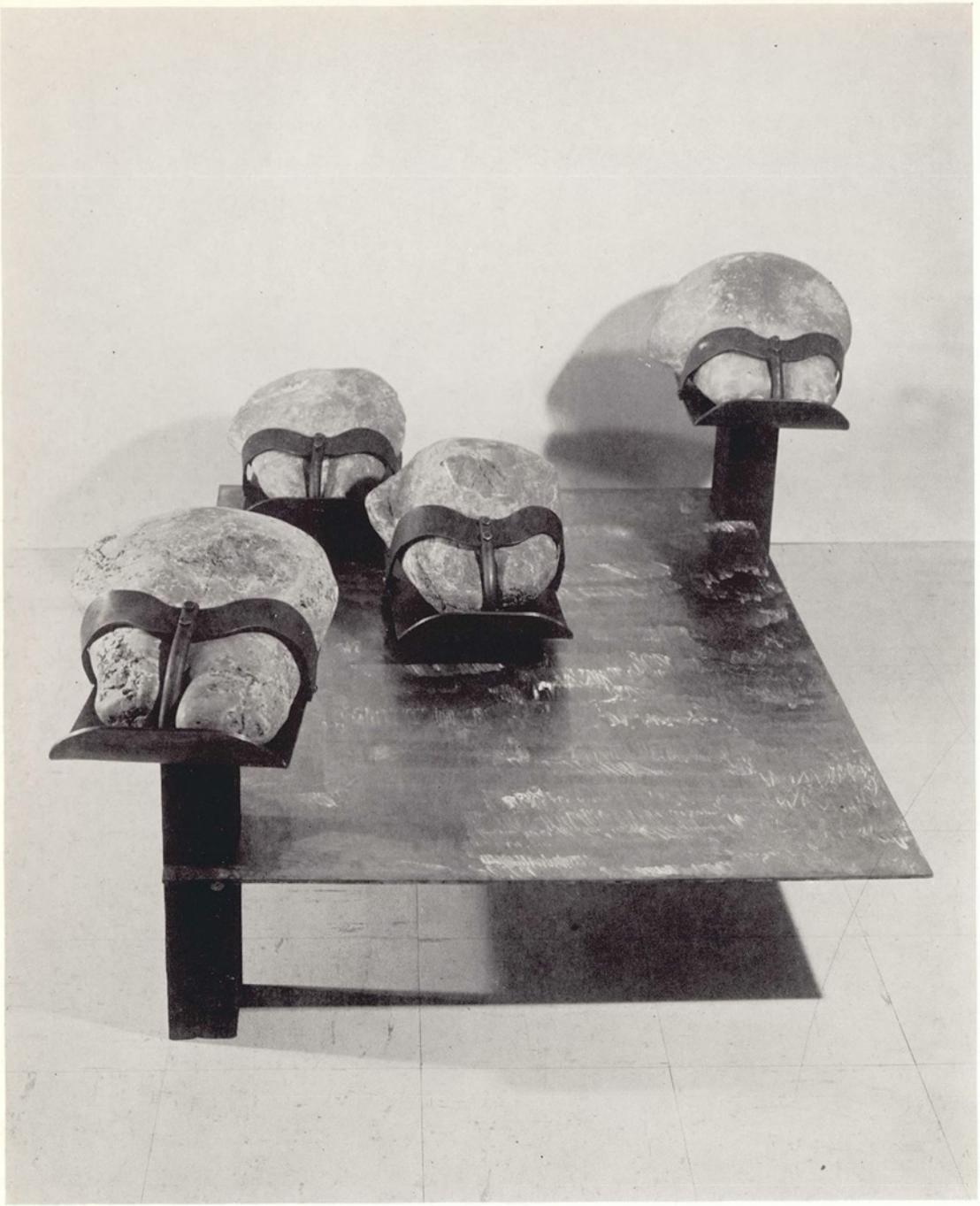
県立近代美術館賞　伊藤愛子　甃の時刻　（洋画）



美術奨学会賞　熊沢　淑　玄Ⅰ　（洋画）

美術奨学会賞　北川健治　diary　（版画）

県議会議長賞　佐久間恭子　広場　（版画）



特選　桐　常夫　石蠅　（立体造形）

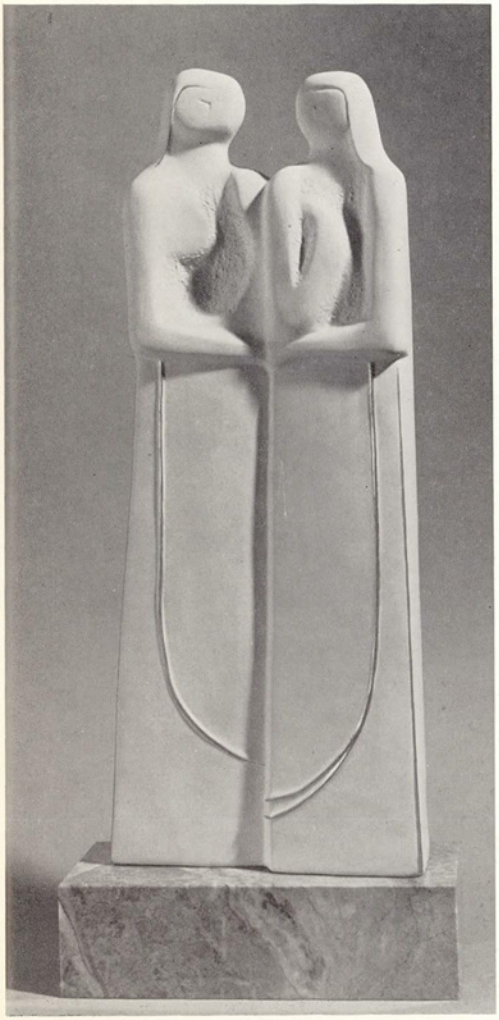
美術奨学会賞　天木房子　早春　（彫刻）

特選　加藤　皇　黒影　（工芸）

美術奨学会賞　木内隆男　直立のモチーフ(A)（工芸）

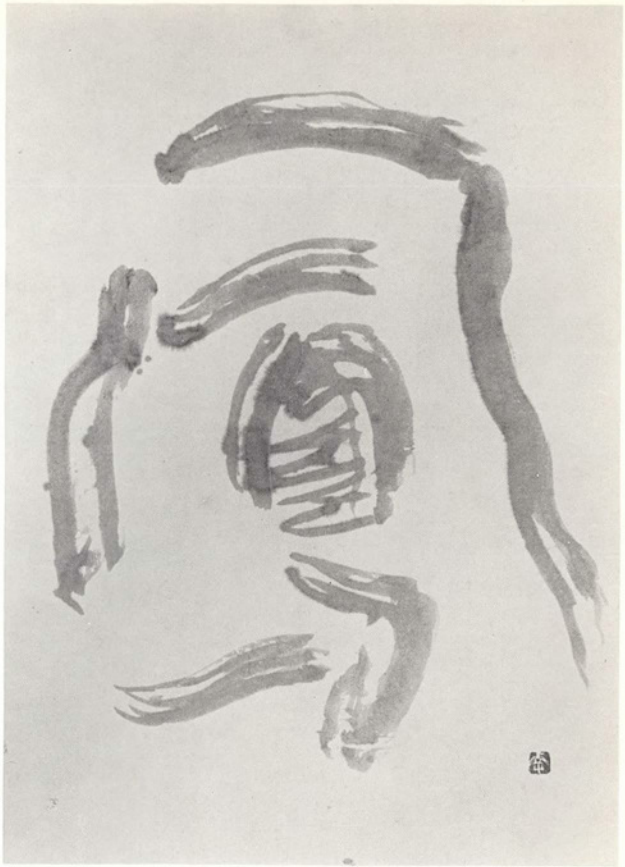
美術奨学会賞　大塚陽子　雷雲　（工芸）

美術奨学会賞　山岸南子　リオーガニゼーション　（工芸）

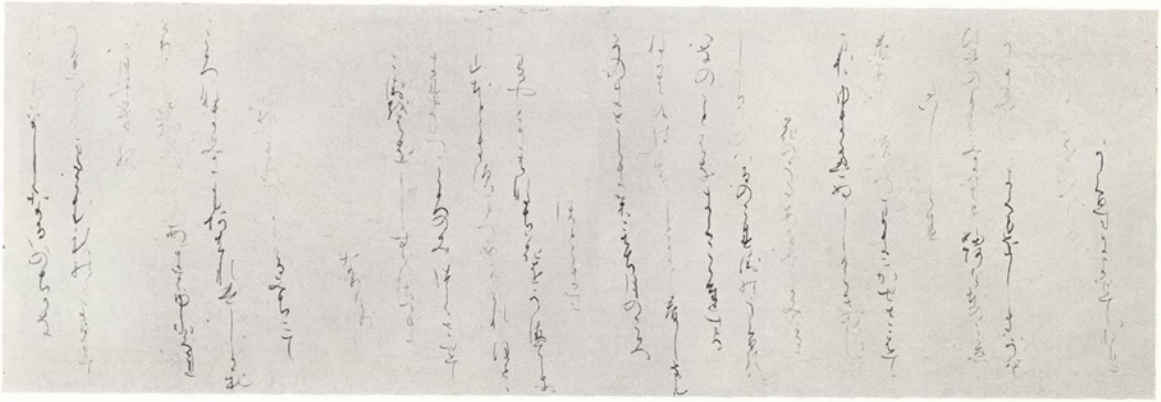


美術奨学会賞　小菅春代　萠　（工芸）

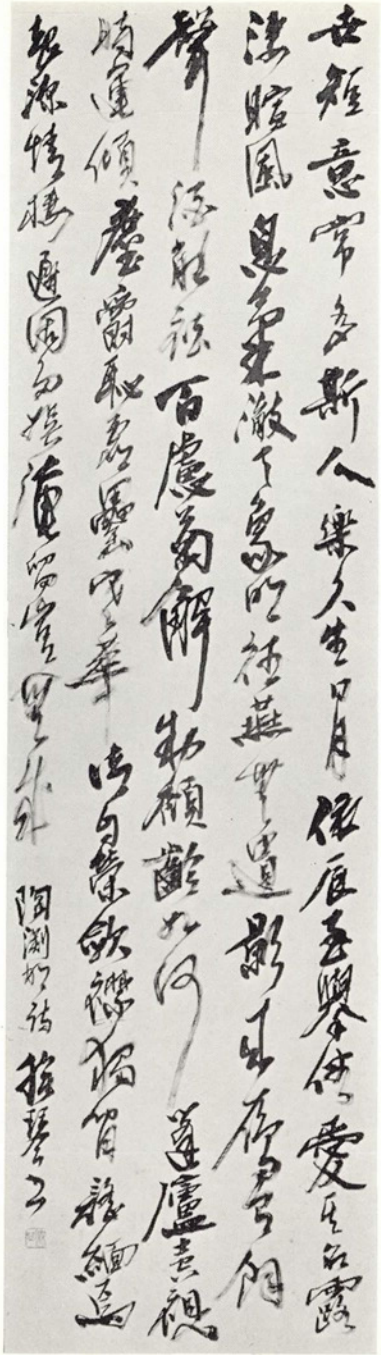
美術奨学会賞　平田徹子　伸　（工芸）



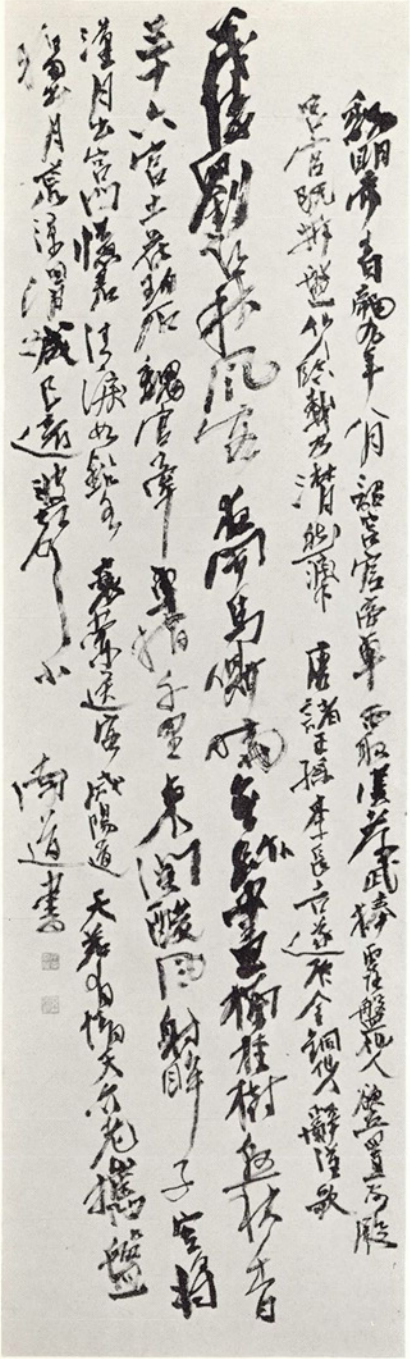
特選　中牟田幸子　鳳　（書）



美術奨学会賞　赤松萬寿枝　山家集抄　（書・部分）

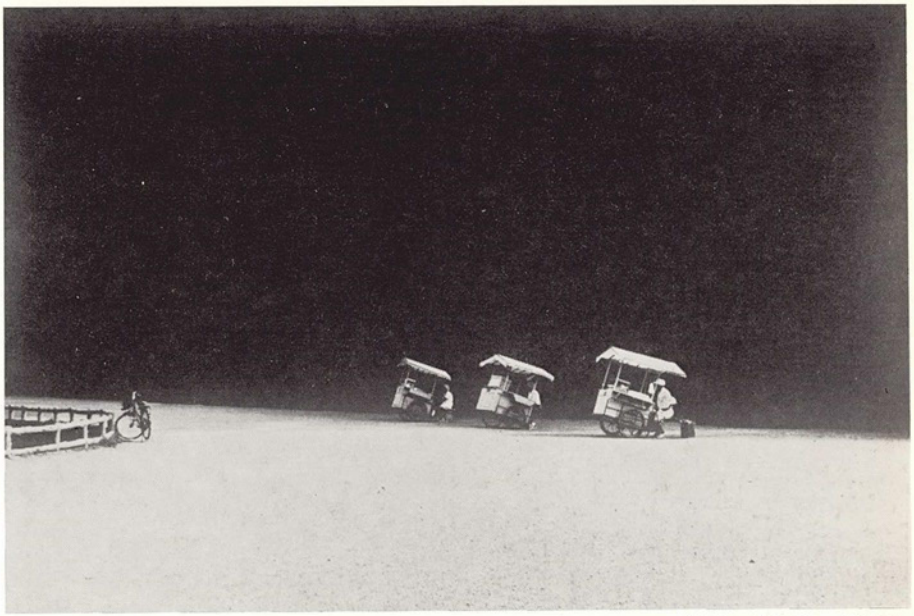


酒井賞　四宮撫琴　陶淵明詩　（書）



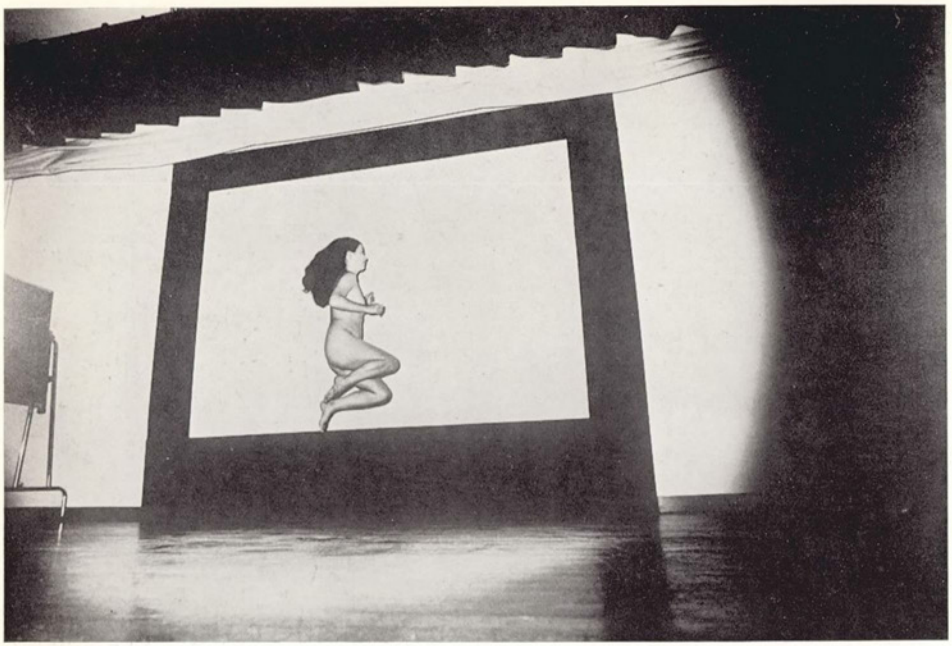
美術奨学会賞　千葉南道　李賀詩　（書）

特選　中島倍三　生活の詩　（写真）

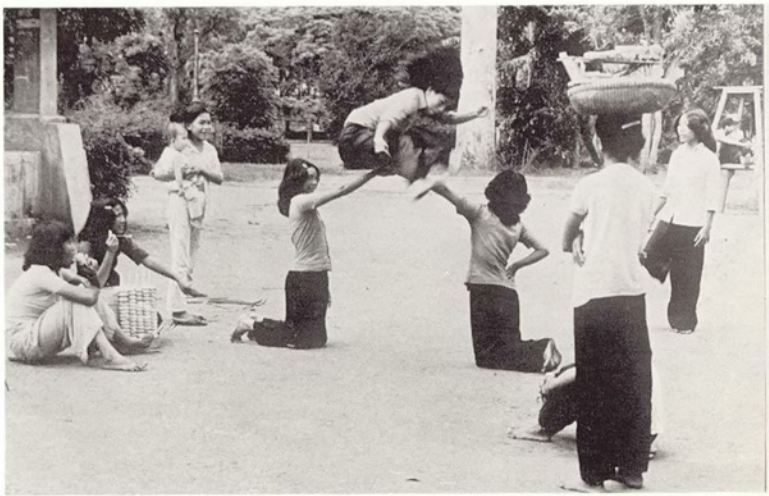


美術奨学会賞　中川みさご　真夏の昼下り　（写真）

美術奨学会賞　笹尾佳夫　砂嵐　（写真）

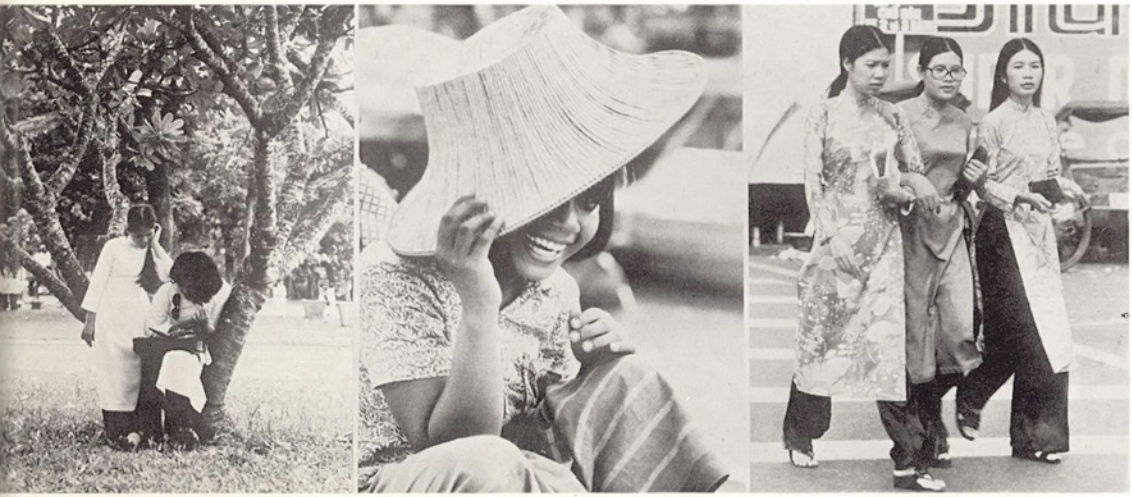


美術奨学会賞　鯉登勝彦　ヌードフォルム　(写真)



美術学奨会賞　菊地喜保　ベトナムの少女　(写真･3枚組)

美術奨学会賞　重野音吉　養護老人ホームとインフレ　（写真）



コンクール部門出品目録

絵画・彫刻部門

入　賞

大　賞

河原　明　蜻蛉　彫刻

神奈川県立近代美術館賞

伊藤愛子　甃の時刻　洋画

特　選

宇野圭一　草の中の女　日本画
桐　常夫　石蠅　立体造形

美術奨学会賞

熊沢　淑　玄 1　洋画
大山　鎮　ベナレス(衆)Ⅲ　日本画
北川健治　diary　版画
天木房子　早春　彫刻

県議会議長賞

佐久間恭子　広場　版画

入選

日本画

豊田克文　泥舟とピーチボール
大貫文江　うたかたの光
石踊達哉　夜の時間
仙波存乃恵　凝視
田中順雄　黙示録
飯野静江　巣守
香野ルミ子　象の物語
加藤敏夫　天使生誕
佐藤隆良　焼廃
大倉葉子　早春
市川保道　風の花 Ⅰ
三縄　健
大山　鎮　ベナレス(Ⅱ)
堺沢美千代　童子(Ⅱ)
山中武夫　飾りのある魚

洋　画

原　のり子　M宗教家の家族
岸　宏士　白い家のみえる風景
松野俊雄　対岸 C
瀬端博美　道化の讃歌
佐藤平七郎　「ピアノ」と人々
北村和士　20800
江野永青　Car-life
富樫京子　内部一窓
森　秀男　希求 B
原　泰文　「LOVE STORY」No. 2
男谷省吾　クレーン車のある風景
田中善明　遠いふるさとの話し(No. 1)
梅田東巳　カーニュ風景
山室紀元　白い家の見える疎林
臼井恵之輔　仮定における環境 2
青木道夫　傍観者達の室
内柴静子　作品 S
本間芳夫　作品 B
木島　悟　雪国 C
野原松栄　BUS STOP
依田瑤子　船着場
熊沢　淑　玄 4
田沢昭男　作品 11
島谷　晃　ちへいせん
　　のぞみ
植田曠躬　プレイス 74-4
鳴　剛　無題 (TABLE WARE)
山下征治　夜の歌
香川　猛　白いメルヘン(Ⅲ)
市川紀征　景 A
桂　宏　破船
青木誠一　街 D
府川美枝子　そしてそれから……
土屋圀代　現 2

水彩画

小池基弘　2つの丘 (2)
関野正光　遊園地

版　画

五島三子男　unti Tled (海の音)
　　unti Tled (八丈島短波跡A)
高岡松男　心の化石
池沢由紀子　オラトリオ Ⅱ
黒田邦男　移行 74-1-2
臼井利兼　スペース (Ⅱ)
北川健治　diary
須山　孝　作品 74'-P-102
高橋　功　鹿おどり N
　　鹿おどり O
佐久間正彦　リンゴのある風景Ⅲ
一色智嘉子　A YELLOW SCENE
長谷悦子　予感 Ⅱ
興松良昌　輝く都市 NO 3
岩川幸弘　NEXT MORNING Ⅱ
両角　修　No. 46

彫　刻

中村　宏　トルソー
芹田静枝　思い出
三藤茂夫　少女
小泉勝雄　自責
柏原花子　立つ
平林利貞　立つ
佐藤千枝子　Tさん
倉賀野廣　夏・「若い娘」
かとうかずこ　首 Ⅰ
深沢三枝子　現
斎藤真理子　春を待つ
波照間陽三　T子の首

立体造形

塩川甲子夫　白き面

増田寅二	貫
砥上賢治	EXPOSURE（発覚）
ニシワキユリカ	もう一つの世界へぬけるための通路
西尾重健	紋様 No 1
中島憲一	上方の円庭
北澤一伯	集合（三枚の板による15個の凹と穴）
片岡世喜	春
高橋勝	案内書に消えた旅行者
栗原昇	予想現象 —4等分—
むとうかずを	形相転移
秋山幸造	0 ≠ ∞

工芸部門

入賞

大賞

石川充宏	Girl in Chair

特選

加藤皇	黒影

美術奨学会賞

木内隆男	直立のモチーフ（A）
平田徹子	伸（しん）
小菅春代	萠（もえ）
山岸南子	リオーガニゼーション
大塚陽子	雷雲

入選

北村訓子	壁掛花
吉田きみ子	光に驕る花よりも…
成毛進	灰釉皿
狩野炎立	炎魂
後藤寿美恵	渦潮
小林信子	ろうけつ染額 しじま
加藤寿之	縄文壺
加藤皇	樹
樋村允彦	態 74
横川雪和	牡丹文鉢
上村桑子	花
赤羽章子	タピストリー・9
石曽根文江	盛器 貝
白井とみ子	浮
星野光雄	鎌倉彫 小花文香合
田村倭文子	紬着尺 春雷
浜田真爽子	初凪
副島てる子	つむぎ格子
竹村佳男	盛器
関田栄也	変形鉢 うず
竹内佳夫	ルート 74
塩田和男	丸遊
大菊昭治	相対
山村助成	光陰の波紋
橋本公恵	露
中村良哉	口色塗硯箱
渡辺輝人	残雪
半井末子	染着物 水仙
南雲陽	74-WORK 8
松本道子	北の川
森川ウタコ	揺揺（ゆら ゆら）
岡本仲子	紬織着物縞
吉田亜火祢	作品 73-5
近弘	小卓
広田花代子	タペストリー 光と影
大宮希敏	アルルカン
市村富美夫	What to do
村上たま	日だまり
城後了太	日本人の心
林良達	環の中の角
秦美智子	都市
田中一幸	宴
林亘	クリスタル 花器 垂水
谷道和博	クリスタル オブジエ
〃	〃 花器
笹本順	線刻文丸盆
太田光子	鎌倉彫 小箱
伊藤信子	盛皿 鳳
長友暁子	720時間ののち
渡部はつ子	望郷
松本幾子	群
須藤寿子	萠（めばえ）
安田律子	皿
永田秋缶	鎌倉彫 双鶴文文庫
鐸木能子	慈
前仲邦哉	青磁 鉢
前田純一	松材盛器
大東律子	朝餉に向う
乾定夫	想
佐々木ゆき枝	閉日
金沢良エ	アカンサス・クロス
河島安弘	ビルの谷間
森脇敏	跳 V
二宮義之	井桁文様寄木欅小箱
川鰭寿文	パターンC
藤塚洋史	風の詩
菅間ゆみい	遠い世界
西窪千映子	彼方へ
脇智子	花
森富ゆかり	郷愁
森かよ子	夜曲
空閑素子	考
川地明子	SUNRISE
堀久代	駅
本田須美子	空ごらん

書部門

入　賞

特　選

中牟田幸子　鳳

美術奨学会賞

千葉南道　李賀詩
赤松萬寿枝　山家集抄

酒井賞

四宮撫琴　陶淵明詩

無鑑査

陳　撫鳳　蘇東坡詩
松橋勝子　古今和歌集
水川舟芳　出郊抵東屯

入選

石井蘭如　良寛詩
景山桃枝　臨曼珠院古今集
岩崎秀恵　臨中務集
尾崎舟甫　李白詩
小山誠一　華
細羽昭満　道
伊藤撫剣　李遠詩
平田白虹　張南史詩
山本撫嶽　李郢詩
矢島撫周　陶潜詩
石井澄水　白居易詩
若林幽蘭　高啓詩
竹内鳳仙　痕
竹下幽光　龔自珍詩
万本素雲　杜牧詩
伊藤明博　唐　詩
沼田雅子　唐　詩
溪口紅洋　李白詩
加藤翠郷　桃花源詩
中山雅恵　臨高野切（第一種）
小林小笛　和　歌
斎藤竹風　近代詩
坂間一之　山
小助川チヨ　夢
川瀬魚石　望
宮崎雅恵　幻
進藤千永　俳　句
大村雅子　近代詩
伊奈翠陽　さくら
相川鉄崖　何子貞集蘭亭
小巻仙空　良寛詩
鈴木鶴芳　萬葉の歌
中島弥栄子　清人詩
河野松藍　古今集の歌　三首
大庭紫苑　新古今集の歌
阿部愛子　和泉式部の歌
八隅真佐子　杜甫詩
栗原秀坡　春　寒
川口流坡　李嘉裕詩
中臣視容子　古今集の歌
村上紫茜　呉偉業詩
篠田朋泉　夜別韋司士得城字
日野珠光　和泉式部の歌
武藤香逸　聞
小川如泉　五言古詩
川瀬三舟　子規の句
関根玄道　八木重吉の詩
船本芳雲　放浪より
斉藤泥石　幹
青木不撓　唐　詩
野沢不倒　王維詩
阿部跳龍　杜少陵詩
杉山紫苑　唐　詩
佐藤看魯　李白詩
酒井脩夕　曹子建詩
吉沢菁萋　韓愈詩
西田静夫　唐　詩
本田梅処　李白詩
丹羽蒼処　李長吉詩
西堀紅処　白楽天詩
生島静月　白楽天詩

写真部門

入　賞

特　選

中島倍三　生活の詩

美術奨学会賞

重野音吉　養護老人ホームとインフレ
笹尾佳夫　砂　嵐
鯉登勝彦　ヌード　フォルム
菊地喜保　ベトナムの少女
中川みさご　真夏の昼下り

入　選

瀬戸久雄　水　面
相川宗八　群鳥百態
清宮新次益　狛　犬
坂内一夫　北　昏
鷲頭宏行　鬼ごっこ
佐藤裕弘　日南海岸
須山　実　子　供
瀬沼章夫　静
松本時二郎　干　潟
水野紘一　のれん
越水亀太郎　岩
武藤俊一　渚
石川正隆　山頂の雲
榎田　守　潮干の浜
渋谷重信　湖　畔
田中清隆　葡萄園にて

平本昌義	小さな抵抗
二階堂　尚	旅役者
石田彌吉	Black & White
鈴木矩孝	渡し
馬場純一	痛恨
加藤惣平	江の電暮色
高橋弘行	暮色
村岡秀男	おんな
山口万造	我家の人気者
加賀原張悦	さあ頑張って
江口多鶴	蝶の舞
益子七郎	みこし
松川忠夫	あくび念佛
臼居一雄	踊る
小宮　勉	節分
杢代新一	朝もや
望月資介	地主
清水秀男	残照
伏見　宏	珠泉院の竹
石塚　力	インドの民
太田信義	我が町
堀坂和夫	攻防
塩川甲子夫	心のふるさと
影山藤郎	飛翔
高橋　勤	老犬
小池将夫	鵜
高橋宰子	野やきの頃
佐藤利江	安乗文楽を護る人々
深沢和雄	EASY
鷹羽金蔵	童たち
松島義行	ヌード
院瀬見統吉	たいこの音
つのだますを	あばれみこし
西尾勝美	若い二人
石川三男	バレーボール
高橋賢司	たけ
吉田健吉郎	千社札
石井邦博	足尾
吉峯達希	埋立地
鈴木英雄	いらっしゃいませ
高橋真治	投網
千屋栄市	石佛
笠原由美子	夜
金親敏雄	ドロ祭り
桜井儀久	たが屋
峯岸誠一	ニシモナイの盆踊り
圓木健市	風のつぶやき
木村勇一	登高
下郡洋一郎	雨の詩
深瀬　彊	樹影
渡辺　満	団地の子供
まなべかずこ	あだし野
中谷好夫	自写像
加藤　昇	乱れる
鈴木　武	休日
桐谷和夫	残雪
松原勇吉	新春の祗園
石川正秋	紅葉
池　志津雄	水蓮
市川　清	雨の湖
柳井秀芳	いなり
雨宮丈三	昼下り
小林富一部	西丹沢の山里
青木繁雄	初詣
山下　宝	若竹
込山　武	山中湖
武井金二	哀感の映像
小川　洸	思い出
松本新三	休憩
寺田義晴	残光
竹山保男	日ノ出
金本竹士	祈り
岸田隆一	初春の里
大平春夫	踊子
藤倉忠明	雨の宮参り
加藤和夫	僕の日曜日
福田　茂	大磯閑日
森田五十六	初冬
五明政太郎	城下町
渡辺憲一	光の中に
遠藤作次郎	ススキとフラミンゴ
清水みどり	雪国
山戸陽子	風景
塚本和男	秋気
井上美根	寿獅子

コンクール展講評

総評・洋画

神奈川県美術展は、今年度、第9回をむかえ、毎回、出品されている、いわば常連の方の水準のたかい作品のほかに、性格のある新人作家が登場されることは、よこぶろべき現象といわねばならない。

ことに、今回大賞をとられた河原明氏の木彫「蜻蛉」は、端正な形と伸びやかな肉づけをもち、選考委員の一致して称讃された作品であった。油絵作品は、一般的な水準はたかまっているが、それを超えた個性にみちた作品がみられないのは残念であった。神奈川県には、多くの優秀な新人作家たちがおられるが、それらの方が、県美術展に出品されていないことは、反省すべきことである。油絵作品のなかでは、伊藤愛子氏の「甃の時刻」の抽象的な抒情作品が、近代美術館賞をうけた。日本画では、宇野圭一氏の「草の中の女」、版画では、北川健治氏の「diary」と佐久間恭子氏の「広場」が推薦され、ことに北川氏の作品は、たかい称讃をうけた。彫刻作品は、すでにのべたように、河原氏をはじめ、天木房子氏の「早春」、立体作品の桐常夫氏の「石蠅」、入賞はしなかったが、かとうかずこ氏の「首Ⅰ」の作品など、高度な力量を示しながら、それぞれの魅惑をよく表わしている作品で、優劣をつけがたい作品であった。

来年度は県美術展の10周年にあたり、その記念展の企画については、近く発表したいという委員会の考えであった。　（土方定一）

日 本 画

応募48点から選ばれた今回の17点の日本画は、前年に比べても、また現在の日本画界のレベルから見ても、十分に納得のいくものであった。むしろレベルアップしているといってよいだろう。

というのは、1人で3点ないし2点出品があってそれらは当然入選の力作だったが、できるだけ多くの作家に入選のチャンスを与えたかったため3点が2点に、2点が1点にと遠慮していただいた内部事情を申し上げれば、判っていただけると思う。

これら17点中から賞候補を5点選出し、最後のグランプリ選こうに参加したわけだが、2点が最後までグランプリ候補に残った事実から見ても、日本画の実力ははかり知れるはずである。

宇野氏の白と黒だけの画面が表現する力強い世界はユニークなもので、線の動きも感情を巧みに表出している。成功作であり、なかなかの実力を秘めている。香野氏の童話的世界にマッチした形態や色彩もよく、今後の発展が待たれるし、三縄氏のトナカイと炎の画面は次第に定着した力量の非凡さを示している。大山氏のたっぷりとした厚い画面はベナレスの風物を遺憾なく表出して自己の色彩をいやが上にも発揮してみごとである。画法や題材とじっくり取り組んで脇目もふらずに進むこれらの作家たちの執念と真摯さには敬意を表さずにおられない。

（竹田道太郎）

版　　画

四十年来の友人棟方君と審査に当ったので、実に順調に運んだ。ごまかしの作品か、はったりか、或は正面からとり組んで精神を打ちこんだものかは、一目で解る。これが芸術の恐ろしさであろう。審査前から入選点数を限られて居るので、力作を四、五点搬入した作家のも一点しかとれなかった時は、申しわけない気持だった。版画の陥し穴は、技巧に走りすぎて、本筋の絵を忘れることである。充分な技を生かして、新らしい世界に突き進む作品に接した時は、爽快である。

受賞審査は他部との合同審査である。吾々二人が一番良いと思っていた版画が、受賞から外されると云う、今回の不合理な審査方法は改めてもらわねばならない。出品者は、受賞も版画担当の二人が決めたと解釈するのは当然である。名前を発表されている吾々二人は迷惑する。大賞は各部で決めた受賞作の中から合同審査で選ぶべきではなかろうか。

（益田義信）

彫　　刻

第9回神奈川県美術展の彫刻部門の審査を終って、その所感と報告を、簡単に申し上げます。

先づ総括的な印象として、この会の入選作品は勿論、応募作品全体が、他の地方の県展に比較して、非常に水準が高いと云うことです。然

しこの事は必ずして喜ぶべき現象とは云えない。何故なら「水準が高い」。と云う事が、同時に、「悪い意味での玄人的な作品に占められている」。と云う現象にもつながっているという事です。この様な誰でもが広募できる会に期待していた素朴なみずみずしい作品に、遂に出合うことが出来ませんでした。此の点は今後の県展のあり方、という問題にもつながって行くのではないでしょうか。

私個人の考えでは、衛生都市的な妙な、願望で、中央展と云うシニセの出店になりつゝあるよう思われ、それではいけないと思うのです。もっとちがった発想をもとにして、行なわれるべきではないかと思うのです。

今回大賞をうけられた河原明君の作品は、未だ、海のものとも山のものとも分らない、若い作品ですが、何か期待させられる新鮮さが感じられました。この作品が、多数の審査員に依って、大賞に推挙されたと云うことは、その意味で、大変嬉しい事であります。

なお、彫刻の応募作品は、39点あり、その中で4点が、賞の候補に上り、うち2点が、受賞しました。

立体造形部門に出品された作品の中に、彫刻部門の方に出して居られたら、或は賞の対象に上ったかもしれないと思はれる作品が一点あった事を附記します。以上　（坂上政克）

立体造形

当然のことが、審査の形式には、他作品その比較による相対的な評価がつきまとうだろうし、会場のスペースから割出した入選点数の配分という制約も見のがすことは出来ないだろう。そこでは常に、作家の眼と審査員の眼という複合的な視野が要求され、単一の視点で作品に接し得ない仕組にまずつきあたるのである。つまり、こうしたコンクールでは、入選作なしという極端なケースがあり得ぬかわりに、妥協の産物である入選作品が、格別優れていなくても別に不思議はないのではあるまいか。不遜にも他人の作品を選定しようとする立場からするなら、その両極の眼がかけ離れることなく近接し、バランスを保つことを願わずにはいられないのである。

受賞した桐氏の作品についても同様なことがいえるのではなかろうか。一票差で大賞を逸したのは全く惜しいの一言に尽きようが、私にはその主題の選び方といゝ、フォルムといい若林奮氏の影響が強く感じられて、最後まで不満が残った。

その他、賞候補に推されながら、票のまとまらなかったむとう氏の作品は、石ころや鉄棒を木形にすっぽりはめこんだパズルのような楽しさがあるが、やはりアイデアが前面に浮出ているようで、無意識のうちに多くの審査員が反発したのかも解らない。又、高橋氏の“案内書に消えた旅行者”は、意図は明快だが説明が多過ぎて、作品の質を浅くしているように思われた。饒舌なのは一向にかまわないが、作者はもっと省略の方法を学ぶべきではなかろうか°　（岡本信治郎）

工　芸

今年の工芸部門の総搬入数は142点であったが、審査の結果、82点を陳列することになった。各務県展工芸部門委員のお話しによると、搬入作品全体が昨年に比べて質的にたいへん向上しているということであったし、又、招待出品者が年々増加しているにも拘わらず、公募数も又、昨年より多いというのは、それだけ新人の搬入が多かったということを意味するもので、質、量ともに向上しつつあるのは県展として誠に喜ばしいことである。東京に近い本県では作者の半数以上が何らかの形で中央展とかかわりをもっており、当然それぞれの会の作風がにじんだものとなるのも又、当り前のことといえよう。それを県という地域の枠の中で賞の順位をつけることの至難さは専門家なら誰でもおわかりのことと思う。工芸部門に於ても各審査員の間で真剣な討議が繰り返され別表のような結果が出た。私としてはまず各受賞者の栄誉を讃えたい。賞に限りがあることが残念だったが、藍染の着物、松材の盛器、金属をうまくとり入れた鎌倉彫などの諸作品は最後まで、受賞を競った力作として印象に残っている。

県展も来年で第10回展をむかえる。そろそろ大きな改革をすべき時が来ているように思われるのである。　（後藤俊太郎）

書

まず、驚異的な応募数をみたこと、更に鑑別と審査に当って過去9年の成績に比して、これまた内容水準の飛躍的向上の感嘆詞を、全審査員が異句同音に発したこと。

創生時の神奈川県美術展から、その成長のために及ばず乍ら力を注いできた私として、今年の書部門の充実ぶりに、ほっと胸を撫でおろす

ことが出たのは、本当に嬉しい。

書は伝統の重味を負い乍ら、現代の東洋の、いや日本人の心を託して国際的に精神文明の偉大さを問う偉大な芸術として、われわれは大変な責任を負わされているわけで、本県の美術展の書の部の充実発展は、ひとり神奈川県だけでなく、日本文化の象徴としての役割を担っていることをおもうと、更に高度な、造形美術への研鑽を、応募者と共に誓わねばなるまい。

入賞作についていえば、過去の作家のしごとにくらべて、それぞれ、より現代的な表現を志向していることが歴然としている。美の定義は時代によって変化しないとはいえ、その表現は時の流れとともに遷り変らねばなるまい。その時代思潮を素朴にうけとめながら作家活動が営まれていることを痛感させられたわけである。

個々の作品評は割愛して、技法に於ても、精神性に於ても、本展の書は他の展覧会の賞作品に優るとも劣らぬ現実を、鑑賞者の方々が吟味して下さるならば大変うれしいことと思う。

（殿村藍田）

写　真

応募点数が増加し、全体のレベルも向上した一面、傑出したものが少なかった感があります。特選の中島倍三氏の「生活の詩」は、公団住宅を背景に、お腹の大きいお母さんとそのお供をしている子供達の野原を行く姿が、ユーモラス描にかれ、牧歌的な佳品。毎年トップは組写真なので、一枚写真であるのが買われた模様。重野音吉氏の「養護老人ホームとインフレ」は、現代社会の問題点をついた作品で、トップを争ったが、養老院を襲うインフレの映像化にまだ一息の表現の弱さが惜しまれた。作者は養護施設の後援会長をしている方と聞いているので、今後の作品に期待しよう。鯉登勝彦氏の「ヌード・フォルム」は、裸女がスクリーンへ飛び込んで行く姿態を捉えて意表をついた。菊地喜保氏の「ベトナムの少女」はベトナムの子供達や若者達の生態を、氏の得意な東南アジア物だけに、見せ方のうまさを感じた。中川みさご氏の「真夏の昼下り」は、造型の美しさを主題にした風景の中で、一番優れていた。単純化された観光地風景が、変ったパターンに表現された。笹尾佳夫氏の「砂嵐」は、とかく甘くなり勝な風影の中で、砂嵐の自然の驚異の恐しさを出そうとした意欲作ですが、晴天時の撮影のためか、砂嵐のすさまじさが出なかったのは残念。それが出れば、当然にトップに伸し上った作品でした。惜しくも賞を逸した望月資介氏の「地主」は、私としては今回の作品中で、一番好きな写真でした。坂内一夫氏の「北昏」は、さすがベテラン作家のもので、光っています。

（奥村泰宏）

審　査　員

日本画・洋画・版画
彫刻・立体造形

大森運夫
加藤東一
竹田道太郎
森田曠平

江見絹子
木村一生
桜庭彦治
田澤茂
田辺謙輔
寺田透
土井俊泰
土方定一
広瀬一二
松本久男
水野英夫

益田義信
棟方志功

浅井行雄
井上信道
坂上政克
安田周三郎

岡本信治郎
斎藤顕治

工芸

赤地友哉
赤堀郁彦
各務鑛三
後藤俊太郎
芝山吉邦
中田呂尚
野田芳正
蓮田脩吾郎

書

青木香流
大道静波
高木三甫
殿村藍田
西川万象
比田井南谷

写真

奥村泰宏
影山光洋
須田恒弘
田中雅夫
常盤とよ子
永田一脩
浜口タカシ

招待部門

招待部門作品目録

日本画

小倉遊亀
山口玲凞　早春
小松澄佳　舞妓
宮本昌雄　冬日
大森運夫　鬼太鼓頌
結城天童　月明
森戸国次　鯉之図

洋画

有島生馬　さつきぐもり
中村琢二　風景
故足立源一郎　尾瀬沼の風景
故高間惣七　那須高原の秋
野村光司　風景
猪瀬踏花　万暦壺の小菊
木下寿々子　シンガポール
木下米子　花
小泉元王　逗子マリーナー
源川雪　スコールの後（マラッカ郊外）
吉崎道治　戸隠
岩館知義　雪の風景
寺井重三　踊り子
国領経郎　若い人たち
鳥居昇　人物
新井康須雄　風景
石田精吾　石仏
阿部和美　谷川岳風景
井口啓　海
梅林良子　小園
矢野雅章　箱根路
樋口善一　アルプスの春
桐生照子　六月の丘
飯島義也　石仏
佐々木文綱　街
出口竜王　Shop
坂本幹男　赤城錦秋
三樹保　相模湖の秋
添田定夫　春光の港
内藤雅彦　十月の信濃路
佐々木雅人（旧福基）　燁
鈴木雪子　人形のいるところ
増田常吉　風景
川島実　雪の遠野
島田四郎　風景
川口栄　風景
佐藤美子　風景
木村光江　静物
戸津文雄　ばら
岡野正樹　紅葉（磐梯高原）
安喰虎雄　静物
岩田栄之助　金時山初秋
越智雄二　風景
木下公男　ローマ
田代利夫　スラブ No. 2
田辺謙輔　樹蔭
石川武彦　野の果て
横尾丈夫　サルタンの家
安宮信也　風景（ある女の肖像）
谷田義信　風景
水野英夫　愛染
赤岩賢三　合奏 74
石井佐一　水ぬるむ
青木一美　少女
江見絢子　青の兆候
前川佳子　風
岡村芳男　スフォルッア城（ミラノ）
志村計介　伊豆風景
横地康國
杉浦勝人　静物
勝田寛一　裸婦
勝呂忠　アダムとエバ
木村一生　気配（1）
木村良枝　balloon
曽根亮　春浅き野
永井肇　風のなげき
古川益弘　風景
田中昇　風景
堀内千里　猫
浜田嘉代　ロンドンブリッジ
荒井茂雄　夜明け
田澤茂　民話
柴田善登　朝の穂高岳
安保健二　船
小林義範　COMPOSITION
瀬島好正　かたち
武林敬吉　壁
油野誠一　午后の風景
細井千鶴子　ひと
田賀亮三　給水塔
広瀬一二　蝶
宇都宮マリ　変容
三橋兄弟治　砂丘と船
井上俊郎　讃歌
塚谷博　曳潮時
塚谷恵津子　静物
森川ユキエ　貝
和田松久　肘をつく女
湯川治郎　ばら
稲木秀臣　ザゴルスク
寺田春弌
佐藤努　失意の地
千田高詩　変身譚
塚本茂　牡丹
中西新太郎　雪の降る町
加藤義雄　静物
浅生田光司　ブライトホルンの夏

小関利雄　風　景
松本久男　伊豆川奈風景
金岩清隆　鳥
越後島芳明　風　景
後藤武久　トレドの橋
善浪　迪　湖畔の新緑
大道健治　水　門
金沢　博　風　景
笹　英子　化　石
北岡数彦　港の朝
江添栄一郎　砂漠の太陽の下で（シルクロードの旅）
桜庭彦治　風　景

水彩画

進藤　清　遠い灯
田中君江　古都ペルージア

版　画

棟方志功　黒面湧女の柵
馬渕　聖　華
佐々木英夫　人間の風景
馬場椿男　遊園地
岡本信治郎　虫世界

彫　刻

高田博厚　石坂泰三の首（制作中途）
安田周三郎　頭蓋J
西谷富士雄　若い女
垣内治雄　六月の風
菅沼五郎　裸　婦
伊藤芳雄　野　牛
円鍔勝三　仏頭をもつ女
長江録弥　座　像（ユノ）
浅井行雄　立　像
円鍔元規　夏の女
松本繁来　宙にあそぶ
井上玲子　さまよう形I
千葉精一　裸　婦
溝口　寛　おんな
斎藤顕治　やまない手
菅沼　緑　ROQUEX THE GRIME
井上信道　像

立体造形

山井イク夫　LANDSCAPE–北の方向①

工　芸

漆芸
赤地友哉　曲輪造　喰篭
赤堀郁彦　夢想の識
飯野啓三　街
岡村康子　金線文　水指

硝子
各務鑛三　クリスタル硝子花瓶
吉田丈夫　オブジェ　クリスタル核　誕生
青野武市　クリスタル花器
小林　貢　クリスタル硝子　花生

金工
慶寺丹長　花器　方形
中田呂尚　切り合セ風炉釜　風炉　唐銅釜　瑞波文釜
永井鉄太郎　オーガニック・コンポーズ
舟越健次郎　蜻　蛉
山口寿雄　茶の湯　釜

染織
磯部　陽　けし
暮田延美　ローケツ　帯

人形
市橋とし子　春の土
野田芳正　残　照
前田金弥　残　照

陶芸
河村又次郎　窯変浮彫文　壺
芝山吉邦　作　品
南雲　竜　砂の国に刻まれた時
富永　脩　三島大皿
平野トシ子　赤絵　鉢
三浦　勇　花の精
小田垣要司　黒釉銀彩花器

木竹
松井三郎　浮　遊
馬場松堂　将

鎌倉彫
江刺栄一　盛　器
後藤俊太郎　龍
小野次雄　A鎌倉彫花鳥文八角盆　B鎌倉彫松竹梅丸盆

七宝
水野矯夫　SGUARDO AMOROSO
佐野登志子　ギリシャの詩

書

青木香流　咲
天野翠琴　はまなすの花
長島南龍　開
鵜飼寒鏡　古　歌
大島嵩山　五言律詩
重田翠村　陸游詩
鈴木小江　習　作
川口芝香　萬葉の歌
佐々木如空　良寛詩
志賀正枝　万葉の歌
斎藤丹鶴　慶
西川万象　白楽天詩
高木三甫　万葉歌
及川初恵　萬葉集の歌より
溪口幽城　七言二句
大道静波　李賀詩　美人梳頭歌
殿村藍田　四友詩
中村松堂　松堂作　七言二句
中平南谿　虚　沖
西村西洲　唐詩　五言長篇
船橋春浦　萬葉集より
岡田扇香　和　歌
山口清苑　七言絶句
吉田蘭処　漢南の春望
鈴木龍雲　寒山詩
萩原櫛風　王漁洋の詩

中山鶴雲	順　天
島津碧嵓	皮日休詩　館娃宮
飯原青洲	春
池上鶴洋	韓愈詩
田中真州	始めて虎と交わる
大西芳流	妙　一
仙場右羊	雲中白鶴
山崎節堂	森槐南　杉田観梅の詩
竹田悦堂	窪田空穂の歌
荒井香竹	草野心平の詩
松本利一	無　心

写　真

永田一脩	ギリシャのトルソ（プーシキン美術館で）
奥村泰宏	ヨコハマ中華街にて
内山知治	スクリンの中のヌード
青木誠三郎	忍野の朝
塩田正男	インドにて
里見力麿	夏　姿
野沢喜七	浦　賀
鈴木健夫	ジャズ
加賀谷武郎	某月冬日
大谷正夫	錯　覚
浜口タカシ	晩秋富士

（順不同）

発行＝神奈川県美術展委員会